
月世界遠足

吉野眞人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月世界遠足

【NZマーク】

N0955P

【作者名】

吉野眞人

【あらすじ】

なぜか月の残骸がある町。月の残骸へとハイキングに誘う彼女。

紫色の夕焼けが空を覆っている。体育の授業が終わった後、俺は屋上にあがつた。

夕暮れ時の質量の軽い風が吹き抜けていく。

「やあ、お疲れ」

金網にもたれて夕空を見つめていた彼女が振り返る。

「また、サボりか。いい気なもんだ」

「上から見てたよ。栗鼠みたいに走り回っていたねえ」

彼女は嘲けるような笑みを浮かべた。

「たまには出ろよ」

「いやなこつた」

彼女は一度も体育の授業に出ていなかつた。彼女が落第することは有り得ない。この地方都市を牛耳る大財閥一家の末娘だから、何でも我慢放題で通つた。制服だつて男子のブレザーを勝手に着つてい る。

俺は彼女の横に並んで、柵にもたれた。

高校の屋上からは月がよく見えた。岩石の塊。巨大な卵の殻のようにも見える。

ここから10kmも離れていない都市のはずれに月、正確にいうと月の破片が大地に突き刺さつていた。昔、月は星や太陽のように宙に浮いていたらしい。隕石の衝突で地上に落ちてきたとか、大昔の戦争で壊されたとか、色々な話があるが、本当のことは誰も知らない。月は夜になり、星達が夜空に瞬くとぼんやりと青白く光つた。俺が月を眺めていると彼女が不意に、声をかけた。

「ねえ、明日、ピクニックに行かない？」

「学校がある」

「なんものさぼっちまえよ」

「あのなあ」

それもいいような気がした。どうせ、明日も今日と同じなんだろ
う。彼女の誘いに応ずるのもまた、面白いかもしれない。俺は少し
考えるそぶりをしてから答えた。

「わかった。行こう。」

「本当？じゃあさ、他に何人か誘つてよ。女の子がいい」
彼女は無責任にそう言つと、楽しげに笑つた。

俺は肝心なことを聞き忘れていた。

「ちょっとまつた！どこいくのさ」

「月だよ。じゃあね」

彼女は身を翻して、さつわと階段を駆け下りていく。

翌朝、俺と彼女は、待ち合わせ場所の橋で落ち合つた。昨晩、3人の女の子に電話をかけたが、結局誰もこなかつた。中学からの同級生には、冗談じゃない学校があるわと言われ、同じ委員会の女の子は、釣り堀に行く予定があるから駄目で、隣の席の女の子は、彼女に言い寄られたからイヤだというつれない返事だった。

「君に期待したのが間違いだつたよ」

彼女は撫然とした表情で、そう言い放つた。結局、二人でいくことになった。彼女は、釣りに行くようなポケットのたくさんある黒いジャケットに、独逸軍降下猟兵の迷彩ズボンという服装だった。スニーカーではなく、登山靴を履き、昼食を詰めたバスケットを持っていた。ちなみに俺はいつものよれたブレザーだ。昼食は彼女の担当だった。勿論、自分でつくれたわけがない。屋敷の料理人に命じて作らせたものだらう。

「じゃあ、行こうか」

「ああ」

空はよく晴れており、少し登つただけで汗ばむような陽気だった。月の表面は、ざらざらとして灰色の岩石が目の前を埋め尽くしていだ。所々、クレーターが丸い穴を開けている。クレーターは実際に様

々なものがあつた。大きいものなら、ちょっとした円形ステージにもなりそうだつたし、小さいものは、下手に落ちたらすっぽりとまりこんで足をくじきかねない。一回の休憩をはさみ、1時間くらいで頂上についた。頂上からは模型のような街が見えた。頂上につくと彼女は大きく伸びをして、街を見下ろす。

「まるで、ゴミみたいな街だね」

彼女はものを放り投げるような口調で言い放ち、シートを敷いて座つた。

俺は彼女の不穏な発言には答えず思った。この月はいつから、ここにあつたのだろう？ 子供の時はなかつたような気がする。気のせいなのか？ そう、母親に手を引かれて、スーパーマーケットから帰る夕暮れの街に巨大な月の破片は、本当に影を落としていたのだろうか。

「さあ、お昼にしようか」

彼女はそういうと、バスケットから包みを取り出した。中身はサンドウイッチだった。

ローストビーフとクレソン、スマーカモーンとタマネギのサンドウイッチ。飲み物は魔法瓶に入れた甘い紅茶。俺と彼女は早速、サンドウイッチを頬張つた。ひどく旨かつた。さすが、財閥一家のお抱えコックがつくつただけある。彼女は、ことの他、血の滴るようなローストビーフのサンドウイッチがお気に入りらしく、俺より一つ多く食べた。デザートには林檎があつた。

「僕、こういうのは苦手なんだよね。皮向いてよ」

「不器用な奴、仕方がねえな」

俺は多少の優越感にひたりながら、林檎の皮を剥ぐ。こういうのは得意だ。

昼食を終えたあと、『ロリと横になる。背中にひんやりとした月の感触を感じる。

寝転がつて、俺達は下らない話に興じた。学校のこと、友人の噂話、俺が彼女にインチキ麻雀で盤裸負けしたことを話すと、彼女は

なにがおかしいのか、大笑いしていた。彼女は、巨大なアンモナイトの化石を買ったことを得意げに話した。彼女の屋敷付属の博物館の中央ホールに飾ったという。

「今度見に来いよ。半端なくでつかいんだからどうやら自慢したくて仕方がないようだつた。

無駄話をしているうちに、太陽は西に傾きながらオレンジの光を放ち、風が冷たさを増していく。空の色は薄い董色になつていた。俺は彼女に声をかける。

「そろそろ帰ろうか。暗くなつちまつ」

「実はさ、この月、偽物なんだ」

彼女は、唐突に呟いた。

「僕の祖父の代から、僕たちの財閥は延々と月の残骸を作つてきた。建築廃材をコンクリートで固めてね。ぼんやり光るのも、ただ蛍光塗料を混ぜてあるだけなんだ」

「じゃ、本物の月は……どこにあるんだ?」

「わかんない。ひょっとすると、月なんて元から無かつたのかも」

「そうか……俺もそんな気がしていたんだ。子供の時から、月なんて本当は無かつたように思えたから。でも、なんで、そんなことをしたんだ。一々、偽物の月をつくるなんて

「偽物でも、無いと心配なのかもね」

彼女は珍しく考えあぐねるような表情をしていた。俺は彼女の方を見つめた。ぼんやり光りはじめた月の燐光が、彼女の身体を浮き立たせている。月の光を下から浴びている彼女は、いつになく綺麗に見えた。

「さつ、かえろいづよ」

彼女は迷彩ズボンについた埃を払つた。

「あ～つ！」

その途端、素つ頓狂な声があたりに響いた。

靴の紐を結び直し、立ち上がりかけていた俺は思わず、転びそう

になつた。

「ど、どひしたんだよ。いきなり」

「明日さ、兄貴のパーティーがあるんだよ。それも格式張った公式の奴。明日はドレス着なくちゃいけないんだ。この僕がだぜ？ あんなヒラヒラして足の寒い格好、やつてられないよ。馬鹿馬鹿しい。あ～あ。嫌だなあ」

延々と続く彼女の愚痴をBGMに俺達は月を降りる。偽の月は、そんな俺達の足下を青白く照らしていた。

(後書き)

僕つ娘です。以上でも以下でもない。オチがないです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0955p/>

月世界遠足

2011年2月13日14時40分発行